

現代フランス語における不定詞を後続する 過去分詞の性・数一致について

武井由紀

0. はじめに

過去分詞の性・数一致については、古フランス語を対象にその規則性がまだ見出されない中での傾向を探るものや、中世フランス語において過去分詞の一致や規則性が構築されつつあった時代の実情把握を試みるものなどの先行研究¹が確認できる。一方、現代フランス語では、直接目的語が動詞に前置される構文においては、複合時制の場合、過去分詞を直接目的語の性・数に一致させるというはっきりとした文法規則が存在する。例えば、修飾関係や強調構文として関係代名詞 *que* を介して直接目的語が過去分詞より前に置かれるものや、話題としているものを補語人称代名詞で受け、直接目的語として過去分詞より前に置かれるものが挙げられる。文法的規則に従えば、このような構文の複合時制では直接目的語が過去分詞より前に置かれれば、必ず直接目的語の性・数に応じた形態変化が過去分詞に生じ、その指標があることで意味内容が明示され正確な意味を表す構文ができあがるわけだが、この規則が適用されない特別な場合が幾つか認められている。そこで本稿では、性・数一致が起きない特別な場合、つまり例外の一環境である、不定詞を後続する過去分詞の性・数一致という言語環境を対象に、コーパスから採取したその例外としての用例を分析することで、規則と例外の実情について考察を行うことを目的とする。

1. 規則・例外と経緯・批評

1.1. 規則・例外

Le Bon Usage (Grevisse, p. 1339)によれば、不定詞を後続する過去分詞の性・数一致については次のような記述が確認できる。例と共に引用する。

915 Le participe passé conjugué avec avoir et suivi d'un infinitif (avec ou sans préposition) s'accorde avec le complément d'objet direct qui précède quand l'être ou l'objet désignés par ce complément font l'action exprimée par l'infinitif.

Les violonistes que j'ai ENTENDUS jouer sont des virtuoses : les violonistes (représenté par que) jouent. — *Je les ai VUS partir comme trois hirondelles* (HUGO, *F. d'aut.*, VI). — *J'aurais eu [...] des chèvres que j'aurais MENÉES brouter dans les buissons* (SAND, *Valentine*, XIV). — *Des hommes que l'on avait [...] ENVOYÉS combattre* (DUTOURD, *Taxis de la Marne*, II, 13). — *Les comédiens qu'on a EMPÊCHÉS de jouer, qu'on a AUTORISÉS à jouer.* — *La Chinoise [...] nous a REGARDÉS passer* (MALRAUX, *Conquérants*, p. 51). — *Je les ai ENTENDUS crier dans le jardin* (SARTRE, *Mots*, p. 40). — *Que de pleurs j'ai VUS verser !*

例文中の大文字で示される通り、直接目的補語が不定詞によって示される意味内容の動作主になる場合は、過去分詞は前置された直接目的補語の性・数に一致することが確認できる。本来、直接目的補語が前置されれば過去分詞を性・数一致させるのであるから、この不定詞の動作を表す場合に性・数一致が起きることは「一致させる」点では規則通りである。しかし不定詞を後続する場合でも「一致させない」場合が例外として認められている (Grevisse, p. 1340)。いくつかの例と共に挙げる。

Exceptions.

1° Le participe *fait* suivi immédiatement d'un infinitif est invariable, parce

qu'il fait corps avec l'infinifitif et constitue avec lui une périphrase factitive :

Je les ai FAIT combattre, et voilà qu'ils sont morts ! (HUGO, *Hern.*, III, 4.)
— *La secrétaire que j'ai FAIT entrer dans cette société, que j'ai FAIT engager. Les fruits que j'ai FAIT macérer dans l'alcool.*

2° Le Conseil supérieur de la langue française, estimant que *laissé* forme avec l'infinifitif qui suit une périphrase analogue à fait + infinifitif, recommande l'invariabilité de ce participe.

3° Le participe des **verbes exprimant une opinion** (*cru, pensé, espéré ...*) **ou une déclaration** (*dit, affirmé ...*) est invariable, parce qu'on est contraint de considérer que l'objet direct est la proposition infinifitive :

Ces lettres que vous m'avez DIT être de madame d'Ange (DUMAS, fils, *Demi-monde*, III, 12). — *Une éducation que j'ai SU depuis avoir été brillante* (BOURGET, *Drames de famille*, p. 41). — *Des sublinités qu'on a RECONNU être des fautes du copiste* (France, *Jardin d'Épicure*, p. 223).

すなわち主動詞が faire と laisser の場合、また、主動詞が意見や宣言、発表を表す場合には、例外として後続する不定詞を一致させないことになっている。

L'accord du participe passé (Grevisse, p. 116) でも同様の記述がみられるが、例外がやや発展的内容であるため、一致させる規則と例外を幾つかの用例と共に続けて引用する。

10. Le participe passé suivi d'un infinifitif

10.1. Règle

Le participe passé suivi d'un infinifitif s'accorde avec le complément d'objet direct qui précède lorsque l'être(ou la chose) désigné(e) par celui-ci fait l'action exprimée par l'infinifitif, qui celui-ci soit précédé ou non par une préposition.

— Les violonistes que j'ai **entendus** jouer étaient de jeunes élèves de l'Académie.

A. Lorsque l’infinitif a son propre complément d’objet direct, le pronom complément direct ne peut s’y rapporter. Le participe passé s’accorde alors avec le pronom.

— Les coureurs, je les ai **vus** escalader les cols de légende.

B. Quand le complément d’objet direct est le pronom partitif *en*, le participe passé est invariable.

— Des feuilles mortes, je n’en ai pas encore **vu** tomber en ce début de septembre.

10.2. Cas particuliers

A. Le participe passé *fait* suivi d’un infinitif est invariable.

— Le soir même, sous prétexte de la raccompagner, il l’avait **fait** monter dans sa voiture.

B. Le participe passé *laissé* suivi d’un infinitif peut demeurer invariable.

— Il y a des points que j’ai **laissé** tomber et sur lesquels je devrais faire repentance.

C. Le participe passé des verbes qui expriment une opinion (*cru, espéré, pensé, su ...*) ou une déclaration (*affirmé, dit ...*) ne varie pas puisque son complément d’objet directe est la proposition infinitive qui suit.

— Une éducation que j’ai **su** depuis avoir été brillante. (Paul Bourget)

— Une petite coupe de porcelaine, vieille et qu’on eût **cru** venir d’un Orient plus lointain. (André Gide)

D. Le cas des participes passés *eu, donné, laissé* suivis d’un infinitif introduit par la préposition *à*.

On peut soit laisser ces participes passés invariables, soit les accorder avec le pronom complément d’objet direct qui précède.

— L’immensité des espaces qu’elles ont **eu** à vaincre et traverser. (Bernard Henri Lévy)

— La première lettre que j’ai **eue** à écrire. (Romain Rolland)

E. Le participe passé de *mettre à, apporter à, porter à ...* doit toujours s’accorder.

— Cette coupe que je t’ai **apportée** à boire. (Paul Claudel)

つまり、*L'accord du participe passé*では*Le Bon Usage*の例外1に相当する内容としてAを、例外2に相当するものとしてBを、例外3に相当するCを示している点まではほぼ同様であるものの、新たに特別な場合のDとして、前置詞àを伴う不定詞がeu, donné, laisséに後続する場合は、これらの過去分詞は不変のままにすることも、あるいは前置された直接目的補語に性・数一致させることも可能であると明記されている。また、特別な場合Eも加えられ、mettre à, apporter à, porter àのような動詞句の場合、過去分詞は常に一致させなければならないことが記されている。

さて、不定詞を後続する場合の過去分詞の一致・不一致の規則については、日本語で書かれたフランス語の文法書でも確認できる。例えば「新フランス文法事典」(朝倉, p. 363-364)では過去分詞の下位項目の一つ「VI. 一致」として、7つの更なる分類を行い、その内の一つ「4° 特別な場合」の中で、本稿で問題とする内容を扱っている。以下、「4° 特別な場合」を例文を除いて引用する。

4° 特別な場合

①**直接構成の状況補語** ある自動詞は前置詞なしに価格・重量・距離などの状況補語を伴う。同じ動詞は比喩的用法では他動詞となる。

②**比較節中の代名詞I'**

- (1) 名詞の代理 (一致)
- (2) 節の代理 (無変化)

③**代名詞**

enが直・目となる場合 en = de celaと考えて、過去分詞を無変化にするのが規則。▶1976年の文部省令で一致も許容。

enが数量副詞の補語となる場合も過去分詞の一致・不一致は一定しないが、無変化が普通。▶文法家の説も一定しないが、enに先立たれる過去分詞は常に無変化を勧める者が多い。

④**〈集合名詞 [数量副詞] + de + 名詞〉が直接補語となる場合**

- (1) 集合名詞の後では、対象のとらえ方によって一致する。▶出会った対象を foule にするか manifestations にするかによる。

(2) 数量副詞の後では、補語名詞が過去分詞に先行するときは一致させるのが普通。補語名詞が後続するときは無変化。

- ⑤ **un(e) des + 名詞 + que** の後 一般には補語名詞に一致。
- ⑥ **名詞 ou 名詞 + que** ▶ 最も近くの名詞との一致が伝統的。
- ⑦ **直・目の属詞を伴う過去分詞** 一般に一致させる。
- ⑧ **cru, désiré, dit, dû, osé, pensé, permis, prévu, pu, su, voulu, など**
直・目となる不定詞・節が省略されているときは無変化。
- ⑨ **過去分詞 + 不定詞**

この「4° 特別な場合」では、不定詞を後続する場合に限らず一致・不一致の違いを整理しているが、本稿で考察対象としている内容は⑧と⑨に関連する。⑧では、先述した *Le Bon Usage* の例外3に等しい *L'accord du participe passé* の C の内容に即したものとなっており、そもそも構文として不定詞によって導かれる節を従えざるを得ない動詞群が含まれるが、それら不定詞・節が省略される場合として、⑨とは別扱いされている。⑨では次のように更なる下位分類がなされた上で解説が続いている。

⑨ 過去分詞 + 不定詞

(1) ⇨ *entendre, sentir, voir, laisser, faire.*

(2) à [de] 不定詞を伴う場合： *les dentelles qu'on m'a appris à faire* 「人が私に作り方を教えてくれたレース」 (cf. *On m'a appris à faire des dentelles*) / *les amis que j'ai invités à dîner* 「私が晚餐に招いた友達」 (cf. *J'ai invité mes amis à dîner*)

(3) *affirmé, assuré, cru, dit, など + 不定詞*。上記 (1) と類似の場合であるが、これらの動詞は不定詞節を目的語とするから無変化 ((1) の慣用は一致させるから、論理は一貫しない)： *la solution qu'on m'a assuré être la meilleure* 「人が私に最良のものと断言した解決」 / *la route que j'ai cru être la plus courte* 「私が一番近いと思った路」 (cf. *la route que j'ai cru(e) la plus courte*)

この (1) では、先述した *Le Bon Usage* の例外1・2、および *L'accord du par-*

*ticipe passé*の例外A・Bで過去分詞が不変とされる *faire, laisser*の動詞だけでなく、*entendre, sentir, voir*, といった感覚動詞を含み、それぞれの項目を参照させる指示になっている。ちなみに例えば *entendre*の項目を確認すると、「*entendre* + 名詞1 + 不定詞[不定詞 + 名詞1]」の場合に名詞1が *entendre*の直接目的語で不定詞の動作主であれば、過去分詞は先行する直接目的語に一致するのが原則、と記されている。(2)では *L'accord du participe passé*の例外DとEに関連する内容を扱い、前置詞à [de]を伴う構文のタイプによって一致する例と一致しない例を示している。(3)は構文としては先に挙げられた⑧の内容に相当するものの、不定詞・節が省略されない場合としてここで扱われていると考えられるが、括弧書きに記されているように、「(1)の慣用は一致させるから、論理は一貫しない」との指摘はもっともである。他にも、例えば「現代フランス広文典」では次のように説明されている(目黒、p. 275-276)。

§ 293 不定詞を伴う過去分詞の一致

(1) 感覚動詞 *voir, entendre*などが不定詞を伴うとき、前方の名詞〔代名詞〕が不定詞の動作主であれば、過去分詞はそれと性数一致を行う。この名詞〔代名詞〕は感覚動詞の直接補語である。

Ces enfants, je les ai vus jouer à cache-cache. 私はその子供たちがかくれんぼをしているのを見た。

Cette fille, je l'ai entendue chanter. 私はその娘が歌っているのを聞いた。前方にある名詞〔代名詞〕が不定詞の動作主でなければ、過去分詞は不変である。この名詞〔代名詞〕は不定詞の直接補語である。

Cette chanson, je l'ai entendu chanter. 私はその歌が歌われるのを聞いた。

(2) 使役動詞 使役動詞 *faire*の過去分詞は不変である。

Voilà la voiture que j'ai fait réparer. これが私が修理させた車だ。

Mes enfants, je les ai fait venir. 私は子供たちを来させた。

(3) 放任動詞 放任を表す動詞 *laisser*の過去分詞は、前方の名詞〔代名詞〕が不定詞の動作主であれば、その性数に一致する。不定詞の動作主でだけ

れば不変である。

Il nous a *liassés* dormir. 彼はわれわれを眠らせておいてくれた。

Les eaux, on les a *laissé* polluer. 海洋は汚染されるにまかされた。

しかし *laisser* の過去分詞をつねに不変とすることも許されている。

(4) *envoyer, emmener* 感覚動詞に準ずる。

Ma sœur, je l'ai *envoyée* chercher du pain. 妹にパンを買いに行かせた。

Les journaux, je les ai *envoyé* chercher. 新聞を買いに行かせた。(不定詞の動作主省略)

ここまでの規則と例外を整理すると、基本的には直接目的補語が不定詞の動作主である場合には、規則として直接目的補語に応じた性・数一致が必要となるが、不定詞が *faire* や *laisser* である場合や、不定詞節が目的語となる場合は規則に反して「一致しない」、明確な例外になることが分かる。また、前置詞を含む動詞句が主動詞、あるいは前置詞を従えた不定詞が主動詞に係るような環境下での過去分詞は一致と不一致が認められていることも挙げられよう。更に、感覚動詞が不定詞を伴う場合という観点から構文を分類する場合、前置された直接目的補語が不定詞の動作主であれば過去分詞は性・数一致を行い、動作主でなければ不変とされているが、不変の場合で不定詞の意味が受け身的な意味となり得る場合でも、形態上、不定詞は不定詞のままであり、意味と形態の違いが捉えにくいということも指摘できる。この点については、例えば、「新フランス文法事典」の「4° 特別な場合」⑨の(3)で指摘されているように、不定詞節が目的語となる場合の過去分詞は「一致しない」という例外の規則であるものの、その種の構文では、法助動詞を除けば、意味的には意見、声明、伝聞、感覚、知覚等を表す動詞が主動詞になりやすいことが推測できる。しかしその場合には直接目的補語が不定詞の動作主に十分なり得る構文が考えられるため、その場合「一致する」規則との整合性が図れなくなる、という矛盾が生じる。結局、前置された直接目的補語が不定詞の動作主であれば過去分詞を一致させるという規則に応じるのか、同じ言語環境において意見などを表

明する動詞や感覚動詞を主動詞として不定詞節を成す構文とみなせば、不定詞の動作主であっても過去分詞を一致させるべきでないのか、一致する規則の条件も、一致させない規則の条件も、一方が他方を完全に排除するような条件ではないと指摘できる。

1.2. 経緯・批評

不定詞を後続する過去分詞の性・数一致についての規則と例外について、*Le Bon Usage* (Grevisse, p. 1340) では、歴史的な経緯を次のように明記している。

Hist. — La règle donnée ci-dessus n'a été instaurée qu'au XVIII^e s., mais l'usage du temps la respectait assez mal : cf. Brunot, *Hist.*, t. VI, p. 1723. — Vaugelas (pp. 179-180), lui, prônait l'invariabilité du partic. passé suivi d'un infin. : non seulement dans *Je l'ay FAIT peindre* ou dans *C'est une espece de fortification que j'ay APPRIS à faire en toutes sortes de places*, mais aussi dans *La Reyne la plus accomplie que nous eussions jamais VEU seoir dans le Throsne des fleurs de Lys*. — Voir l'ex. de La Bruyère au § 907, *Hist.* — Vaugelas exigeait même l'invariabilité quand l'auxiliaire était être : *Ma sœur est ALLÉ visiter ma mère* (p. 501).

En anc. fr., le partic. passé conjugué avec *avoir* variait souvent (même *fait* : cf. ci-dessous) devant un infin., quelles que soient les circonstances : *Son pastor, qui s'anime [= âme] at ENTREPRISE a garder* (*Poème moral*, 1062, éd. Bayot). — *Ceste aventure que Dex [= Dieu] li avoit DONNEE trover* (*Mor Artu*, cit. Moignet, p. 207).

古フランス語では *avoir* と結び付いた過去分詞は周辺環境にかかわらず不定詞の前ではよく変化していた事実があり、これまでに述べてきた規則は18世紀に入ってようやく制定されたものの、実際の言語使用で厳密に守られてきた規則とは到底言えず、Vaugelasにおいては助動詞 *être* を伴う場合でさえ性・数一致をさせない、つまり無変化のまま用いていたほど、不定

詞を後続する過去分詞を一致させなかった事例が確認できるというのである。

他にも、「フランス語統辞論」(鳥岡, p. 730)によれば、不定詞を伴う場合の過去分詞の一致・不一致は不定法節の枠組みの中で捉えられており、「主動詞の直接目的補語(対格)が不定法の意味上の主語になるもの」として、「ラテン語の『不定法付き対格』を継承したもの」であるという。なお、同書では主動詞によって、1) 感覚動詞: *entendre, sentir, voir ...*、2) 言説・思考動詞: *croire, dire, savoir ...*、3) 使役・放任動詞: *faire, laisser ...*、と三種類の分類がなされている。

このように歴史的経緯としては、一致が慣用的であったところに一致させない事例や規則が後続したとはいえ、*Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne*では、「14. Participe passé suivi d'un infinitif.」において、「Critique de la règle.」として次のように述べている(Hanse, p. 647)。

Si nous reprenons les exemples du début, *Les arbres que j'ai vu planter. Les arbres que j'ai vus fleurir*, il est aisé de constater que l'analyse justifiant la règle est arbitraire. Posons la question *quoi* après le verbe conjugué (*J'ai vu quoi ?*) ou après le groupe formé par ce verbe et l'infinitif (*J'ai vu planter quoi ? J'ai vu fleurir quoi ?*). Aux deux types de question, même réponses : *J'ai vu planter les arbres. J'ai vu fleurir les arbres*. Si l'on remplace l'infinitif par un passif, on constate qu'on peut dire : *J'ai vu les arbres qui étaient plantés* aussi bien que *les arbres qui étaient fleuris*. Dans les deux cas le complément de *J'ai vu* est une proposition infinitive avec ou sans sujet exprimé et le participe devrait logiquement rester invariable. Mais on a voulu trouver une fonction au pronom relatif et on a imposé la règle au nom de phrases inventées : *J'ai vu les arbres fleurir* ou *fleurissants* ou *qui fleurissaient* ou *qui étaient en train de fleurir*, en opposition à *J'ai vu quelqu'un plantant les arbres*.

確かに、*J'ai vu quoi ?* という問いと、*J'ai vu planter quoi ?* や *J'ai vu fleurir quoi ?* という異なる問いを考えてみれば、*J'ai vu planter les arbres. J'ai vu*

fleurir les arbres. という表面的には同じ形で示される一つの文がそれぞれ機能や意味の異なる二種類の文に対する答えになり得る、という言語事実が確認できる。受け身を表す方の構文は、指摘されている通り、*J'ai vu les arbres qui étaient plantés* や、*les arbres qui étaient fleuris* で言い換えられることからこの事実を確認できるが、どちらの場合も *J'ai vu* の補語は、主語が表されているようがいまいが不定詞節であり、論理的には過去分詞は不変のままとなるはずである。しかしながら例えば *J'ai vu quelqu'un plantant les arbres* に対する *J'ai vu les arbres qui fleurissaient* のように、関係代名詞に何らかの働きを見い出そうとして規則を課したのだとここでは捉えられている。つまり、既に述べた矛盾点同様、不定詞節という見方をした場合の過去分詞の不一致と、不定詞の動作主として捉えた場合の過去分詞の一致という、一つの言語表現に対して異なる見方をすることによる一致・不一致の整合性が問題視されていることがうかがえる。

また *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne* では、先述の *Le Bon Usage* に記載されている歴史的背景に加え、複合時制において過去分詞を不変のままとする傾向は、17世紀における不定詞の発音や、この種の文では文意を決定づける最後の言葉まで把握しなければならなかったことに依るものであったことも指摘している (Hanse, p. 647-648)。

Ce n'est pas seulement la logique qu'on peut invoquer contre la règle, c'est aussi l'histoire de la langue. Elle justifie l'invariabilité du participe conjugué avec *avoir* et suivi d'un infinitif. La doctrine et l'usage de l'époque classique raisonnaient autrement que nos grammairiens. On n'hésitait même pas à laisser invariable devant un infinitif le participe conjugué avec *être*. La tendance à laisser le participe invariable reposait au XVII^e siècle sur la prononciation du participe et sur le fait qu'« il faut aller en ces sortes de phrases jusqu'au dernier mot qui termine le sens » (Vaugelas) : au moment où, dans nos deux exemples, on prononce le verbe conjugué *j'ai vu*, il peut encore être suivi de *planter* ou de *fleurir* ; il est donc comme en suspens et il convient de le laisser invariable comme on

laisse invariable le participe suivi de son complément d'objet direct (*J'ai fini mes devoirs*). Ajoutons que la langue classique était parfois tentée de laisser le participe invariable quand il ne terminait pas la phrase : ce n'est qu'au XIX^e siècle que la règle s'est vraiment imposée.

また、規則は最も優れた作家達にさえも守られていたものではないことも指摘し、多くの規則に反する例を挙げつつ、結論としては、不定詞節が補語になるような場合でしか過去分詞の不変を一般化するべきではなく、規則は守るべきだと主張している (Hanse, p. 648-649)。

Il faut surtout reconnaître que, même chez les meilleurs écrivains, la règle est si souvent transgressée que, dans un autre cas, on n'hésiterait pas à la déclarer caduque. Mais elle est sacro-sainte ! Il arrive que la transgression aille vers un accord fautif : *Les mêmes tendances instinctives qu'ils ont aidées à déclencher* (E. Ionesco, *La chasse à l'homme*, Le Figaro, 6 mai 1972). Mais presque toujours elle aboutit à cette invariabilité que la logique justifie et vers laquelle tendait l'usage classique. Qu'on en juge, en prenant en considération la qualité des auteurs cités et la simplicité des cas : *Les contradictions qu'ils ont sentis se dresser en eux et devant eux* (A. Gide, *Journal*, janvier 1925).

Conclusion : Aussi longtemps que la fréquence du bon usage ne justifie pas l'invariabilité (qu'on peut trouver logique), il faut respecter la règle et ne généraliser l'invariabilité que dans les cas du type qui vient d'être cité à propos des verbes d'opinion ou de déclaration ayant en fait pour complément une proposition.

以上、不定詞を後続する過去分詞の性・数一致について、その規則と例外を踏まえた上でそこに至る歴史的経緯を確認してきた。その過程で生じた疑念は、不定詞節が目的語となるような場合の過去分詞について、実際に、はたして過去分詞は例外の規則通り一致させないのか、それとも直接目的補語が不定詞の動作主であれば規則通り一致させるべきなのか、ということである。 *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne* で指摘

されているように、問題視される類の構文では不定詞で表されるものが意味的に受け身である場合でも、不定詞が直接目的語を従える純粋な他動詞として機能する場合でも、表面的な形態として不定詞は不定詞のままである。そのため、例えば前置された直接目的補語が不定詞の動作主という条件で過去分詞が一致しない例があると仮定すれば、次の二つの解釈しかできないことになる。例外の規則に依じて不定詞が受け身的な意味解釈ができるために一致していないものなのか、それとも一致させる規則に従わない反例として、過去分詞が一致していないものなのか、である。よって、このような言語事象を調べることができれば、少なくともこの規則と例外にかかわる実状が浮き彫りになり、何かしら現状をより良く理解するための糸口が見えてくるのではないかと推測できる。

先述したように、問題視される類の構文では法助動詞を除けば、意味的には意見、声明、伝聞、感覚、知覚等を表す動詞が主動詞になりやすい。そこで、受け身的な意味が表されやすいものとして主動詞に *voir*, *entendre* を取り、不定詞を後続する構文を対象として用例の調査を行った。

2. 言語実態

2.1. 用例採取

本稿では実例を調べるためのコーパスとして Frantext (*intégré*) を用いた。用例を採取した時点で対象としたテキスト数は、2016年8月8日の時点でデータベース上に登録されていた4746 *textes* である。検索条件としては、1900年以降に出版されたテキストに限ったこと²、また、過去分詞の性・数一致の有無が把握しやすい形態として前置される直接目的補語は *les* に限定した。主動詞としては *voir* と *entendre* の複合時制であるため、主語が異なるものを想定し、更に性・数一致が起きていない実例を確認するため、*voir* は *les ai vu*, *les as vu*, *les a vu*, *les avons vu*, *les avez vu*, *les ont vu* を、*entendre* は *les ai entendu*, *les as entendu*, *les a entendu*, *les avons entendu*, *les avez entendu*, *les ont entendu* の合計12形態の出現例を調べた。これらに不定詞が後続する例

を確認する部分は手作業で行った。

抽出条件として上に挙げた形態はそれほど頻出するものではなく、さらに不定詞を後続する構文となると数に限りはあるものの、*voir*, *entendre*ともに次のような結果になった。表内の「 ϕ 」は*vu*, *entendu*が不変、すなわち性・数一致をしていない例であることを示す。

« voir »	
les ai vu ϕ	7例中、不定詞を伴うもの7例
les as vu ϕ	該当なし
les a vu ϕ	5例中、不定詞を伴うもの5例
les avons vu ϕ	1例中、不定詞を伴うもの1例
les avez vu ϕ	該当なし
les ont vu ϕ	4例中、不定詞を伴うもの4例

« entendre »	
les ai entendu ϕ	1例中、不定詞を伴うもの1例
les as entendu ϕ	該当なし
les a entendu ϕ	2例中、不定詞を伴うもの1例
les avons entendu ϕ	1例中、不定詞を伴うもの1例
les avez entendu ϕ	該当なし
les ont entendu ϕ	該当なし

表1

まず、*voir*の用例では、*les ai vu*という形態は7例確認でき、そのすべてにおいて不定詞を伴う例であった。但し、受け身的な意味を表すか否かについては7例中、次の2例が該当するのみで、残る5例では*les*が不定詞の表す動作主である言語環境であり、一致させる規則に反する例であることが確認できた。

例1：

... trop familières. « Je suis né ici ; regardez la façade, la plaque : “Monsieur Morel,

architecte, 1883.’ Une bonne maison bourgeoise. Venez, entrons ... Ces murs, je **les ai vu** peindre ... du faux marbre... C’est beau le faux marbre, c’est habile ... du stuc mélangé de couleurs bien dosées ... et les veines faites par-dessus, mais comme si ... (BIANCIOTTI Hector, *Sans la miséricorde du Christ*, 1985, p. 69)

例2 :

... je l’ai vu couper en deux sous mes yeux par un boulet. Et puis, ce qu’il y avait de plus saint pour moi, ce fut leur tour, mon père et ma mère avec les vôtres, *Sygne. Je **les ai vu** tuer comme des animaux, j’ai reçu leur sang sur la face, qui leur sortait du corps et j’en ai respiré la vapeur. Le roi qui était mon roi, le droit qui était mon droit ... (CLAUDEL Paul, *L’Otagé*, 1911, p. 233)

lesが不定詞の表す動作主を示す5例の内、3例を以下に引用するが、例4では「もの」がその動作主である。

例3 :

... Constant, rue Mazarine, qui maintint longtemps la tradition folklorique du margotin et de la tête de moineau, après que tout le monde eut descendu le Godin à la cave. Je **les ai vu** disparaître un à un, les bougnats de quartier, mussés à l’ombre des petites rues transversales. L’hiver, ils nous montaient au quatrième étage le sac de charbon ... (CARADEC François, *La Compagnie des zincs*, 1986, p. 42)

例4 :

... s’opéra dans mon esprit : à la maison Usher comme au château de Dracula, à toutes les maisons hantées du roman comme aux «maisons du pendu» de la peinture, l’Ancien Observatoire se mit à servir à la fois de référence matérielle instinctive et de truchement imaginaire. Le lierre, la mousse de son mur d’enceinte détrempé, le mauvais oeil, la vigie maléfique de sa logette vitrée, sondant la nuit plus noire qui va bientôt s’amasser autour de la colline, je les ai non seulement décalqués arbitrairement, année après année, sur cent pages dépareillées de mes lectures, mais je **les ai vu** resurgir dans mon souvenir, intacts et familiers, au rappel le plus ténu et parfois le plus arbitraire : aussi bien au Port Blanc, où, dans la nuit de septembre déjà ... (GRACQ Julien, *La Forme d’une ville*, 1985, p. 71)

例5 :

... Il s’avança vers l’escalier et il reconnut que les voix venaient du rez-de-chaussée. Il descendit les marches une à une. Quand il fut arrivé à la pomme de la rampe, il aperçut une lumière filtrant par la porte entrouverte de la cuisine. C’était Fernande qui bavardait avec le cuisinier. – Moi je **les ai vu** arriver, disait le cuisinier. Ils menaient cet enfant comme si ç’avait été un malfaiteur. – Mais alors, répondit la servante, vous avez pu constater qu’il portait de beaux habits et qu’il appartient à une bonne famille. Je vous le répète pour la dixième fois, le père a exigé qu’on l’enferme à double tour et qu’on monte la garde pour qu’il ne s’échappe pas. M.. Berrèque a téléphoné, vous pensez bien, et le père lui a répondu cela. Ce serait un beau résultat ... (DHÔTEL André, *Le Pays où l’on n’arrive jamais*, 1955, p. 25)

形態 **les as vu** については該当する用例がなく、**les a vu** では5例が抽出でき、5例とも不定詞を伴う用例であった。参考としてその内2例を以下に例6、例7として挙げる。なお、5例において受け身的意味で用いられている用例は確認できず、いずれも **les** が人で動作主を示すものであった。

例6 :

... ensevelis il y a 30 ans. Une enquête est en cours. Trois personnes ont ce jour-là rendu visite à Oswald Zeitgeber. Elles sont arrivées à peu près en même temps – le peintre **les a vu** passer les unes après les autres à quelques minutes d’intervalle – et sont reparties ensemble. Toutes trois étaient déguisées à l’occasion du bal costumé. Elles ... (PEREC Georges, *La Vie mode d’emploi : romans*, 1978, p. 286)

例7 :

... manches vert-de-gris, qui l’attrapent aux épaules et le hissent. “d’abord qu’est-ce qu’il en sait, ce con-là ?” “oui, qu’est-ce qu’il en sait ? S’ils sont partis, il **les a vu** partir, c’est tout.” les voix coléreuses explosent derrière *Brunet, *Brunet sourit sans rien dire. “il le suppose, voilà tout, dit *Ramelle. Il suppose qu’ils ... (SARTRE Jean-Paul, *La Mort dans l’âme*, 1949, p. 283)

les avons vu については1例が確認でき、その用例が不定詞を伴うものであ

り、かつ受け身的意味を表すものであった。例外の規則に応じて一致していないものであるが、参考までに例8として引用する。

例8：

... même temps que le nôtre ont tenu à porter le premier et le plus courageux de leurs efforts sur le plan de l'assainissement monétaire et financier. Ces réformes, M. d'Astier y a fait allusion ; nous **les avons vu** réaliser tantôt en Belgique, tantôt en Hollande, tantôt en Tchécoslovaquie et, plus récemment encore, en Union soviétique – à l'occasion de quoi, d'ailleurs, nous ... (MENDÈS-FRANCE Pierre, *Œuvres complètes. 2. Une politique de l'économie. 1943-1954.*, 1985, p. 213)

形態 **les avez vu** は該当例が見つからず、**les ont vu** については、4例が見つかり、4例とも不定詞を伴い動作主を表すものであった。例9はやや理解しにくいものの物が主語であり、残る3例は自動詞的な意味で不定詞が用いられている。

例9：

... la plus mystérieusement simple de la géométrie et la forme la plus assise, la plus indéfiniment stable de l'architecture. Et, à présent qu'il ne reste aucune trace de leurs fresques à personnages, de leurs enduits multicolores, à présent qu'elles ont pris la même couleur morte que le désert, elles sont là comme de grands ossements, comme de grands fossiles n'ayant d'ailleurs plus de contemporains sur la terre. En dessous par exemple, c'est autre chose ; en dessous demeurent encore des hommes, et même beaucoup de chats et beaucoup d'oiseaux qui, de leurs yeux, **les ont vu** bâtir, et qui dorment intacts, emmaillotés de bandelettes, dans l'obscurité des seringues ; nous savons, pour y avoir pénétré jadis, ce que cachent les entrailles de ... (LOTI Pierre, *La Mort de Philae*, 1909, p. 1271)

例10：

... la sorte à combattre les irrégularités des débits alpins et à régulariser par là même la production. Les idées reviennent enrichies et fécondées, aux lieux mêmes

qui **les ont vu** naître. Dans ce même dauphiné, il s'est produit en ces dernières décades, et grâce à la houille blanche, un fait industriel et social dont les conséquences peuvent ... (BRUNHES Jean, *La Géographie humaine*, 1942, p. 36)

例 11 :

..., retrouver leur pleine expression que sur une scène où leur soient restituées des conditions analogues à celles de la scène grecque ou de la scène élizabéthaine qui **les ont vu** naître. Je dis analogues, car en matière de mise en scène il faut laisser du champ à l'esprit et se défier de toute reconstitution servile. Mais il est probable que si ... (COLLECTIF, *Arts et littérature dans la société contemporaine*, dir. Pierre Abraham: t. 2, 1936, p. 6404)

例 12 :

... du jour me soit ravie elle s'échauffera de mon enlacement. La mer, abondamment sur le monde étalée, gardera, dans la route errante de son eau, le goût de ma douleur qui est âcre et salée et sur les jours mouvants roule comme un bateau. Je laisserai de moi dans le pli des collines la chaleur de mes yeux qui **les ont vu** fleurir, et la cigale assise aux branches de l'épine fera vibrer le cri strident de mon désir. Dans les champs printaniers la verdure nouvelle, et le gazon touffu sur ... (NOAILLES Anna de, *Le Cœur innombrable*, 1901, p. 30)

主動詞に *entendre* を取る用例については *voir* と比べると非常に少なく、表1で確認できるように、*les as entendu*, *les avez entendu*, *les ont entendu* で不定詞が後継する実例は抽出されなかった。限られた用例の中ではあったが、*les ai entendu* は不定詞を伴う例が1例確認でき、例13で示す通り、「もの」が動作主として解釈できるにもかかわらず過去分詞が一致していない、規則に反する用例である。

例 13 :

... Mais du moment qu'elle restait pure... – Et puis même. Elle aurait eu une petite liaison par-ci par-là. On ne peut guère lui en vouloir, hein ? Il a serré les dents. Je

les ai entendu grincer. – Je suis certain que non, il a fait. Elle me l’aurait dit. – Vous la voyiez souvent ? – Elle venait nous voir à Courville, et des fois je montais à Paris. Elle ... (MANCHETTE Jean-Patrick, *Morgue pleine*, 1973, p. 98)

les a entendu を含む用例は2例確認できたが、その内の1例だけが不定詞を伴い、前置された人を表す les が不定詞の動作主となる、これも規則に反する用例である。

例 14 :

..., moi, je fous le camp, a annoncé le second barbu et il s’est précipité hors de la pièce. – Traître ! Salaud ! a crié le second barbu en courant à la poursuite du premier. On **les a entendu** dévaler un escalier. L’Arabe m’a regardé d’un air incertain. Il n’avait pas l’air con, lui, mais il n’avait pas l’air non plus très gentil. – Monsieur Tarpon, m’a-t-il dit, si j’étais certain de ce que suppose ... mon camarade, je vous abattrais sur place. – Je ne sais pas ce qu’ ... (MANCHETTE Jean-Patrick, *Morgue pleine*, 1973, p. 121)

例 15 が示す les avons entendu については、実はテキストの種類として「articles de presse」に分類された素材で、残念ながらこの記事の出版年が記されておらず、今回の用例採取条件に該当するかどうかを確認することはできなかった。しかし、entendre の用例が非常に限られていることを考慮し、ここでは引用しておく価値があると判断して引用しておく。なお、この用例は受け身的表現である。

例 15 :

... fut faite à la famille, par l’empressement qui n’alla point sans querelles des admirateurs qui tinrent à se compter derrière le défunt maître. Ces doléances, nous **les avons entendu** exprimer encore par Pélagie, la vieille servante, qui eût voulu fermer les yeux de monsieur et l’ensevelir ; mais il était allé mourir en ville. Pauvre bonne femme ... (*Articles de journaux relatifs à Alphonse Daudet*)

2.2. 分析

本稿の調査条件に限られるものの、2.1.で挙げたものが、*voir*と*entendre*を主動詞として不定詞を後続する場合の、*les*が前置する複合時制における過去分詞の性・数一致の言語実態である。これらの用例からまず見えてくることは、不定詞を後続する例で過去分詞が不変のまま表出している例が相対的に少ないことである。実は、性・数一致している例も今回の採取作業時に確認したのだが、不定詞を後続させつつ過去分詞が性・数一致している例は、一致しない例を大きく上回る数で認められた。また、過去分詞が性・数一致していない例であっても、表1の数字で示されている通り、不定詞を伴わない用例が認められ、その構成内容としては過去分詞の後に何も後続させずに文を完結するもの、あるいは読点を添えているもの、または過去分詞の後に不定詞ではなく、現在分詞や更なる過去分詞を添えている例が確認できた。したがって、これらの不定詞を後続させない用例の存在と、不定詞を後続する例で過去分詞が性・数一致することなく表出している用例の存在は、少なからず相反する傾向を示していると思取り取ることができるかもしれない。換言すれば、不定詞を後続させない表現を用いれば、より自然な産出表現になると同時に、間接的に性・数一致の問題を避けることにつながると捉えることもできる。

次に指摘できることは、問題視されている構文の、主動詞による表出の差異である。用例の分析から見えてきたこととしては、*voir*と*entendre*を比べた場合、*voir*を主動詞とする用例の方が不定詞を後続する例数が多いことが挙げられる。また、*voir*を主動詞とする用例の方が、例外の規則に応じて過去分詞を一致させていないと解釈可能な、受け身的意味で用いられている用例が多く確認でき、さらに自動詞の用例も不定詞が表すものとして確認された。先に挙げた表1にこれらの用例数を加えてみると次のように改めることができる。

« voir »	
les ai vu φ	7例中、不定詞を伴うもの7例 →7例中、2例が受け身の意 ⇒ 5例が反例
les as vu φ	該当なし
les a vu φ	5例中、不定詞を伴うもの5例 →5例すべて、受け身の意を表さない ⇒ 5例とも反例
les avons vu φ	1例中、不定詞を伴うもの1例 →その1例が受け身の意
les avez vu φ	該当なし
les ont vu φ	4例中、不定詞を伴うもの4例 →4例すべて、受け身の意を表さない ⇒ 4例とも反例

« entendre »	
les ai entendu φ	1例中、不定詞を伴うもの1例 →その1例は受け身の意を表さない ⇒ 反例
les as entendu φ	該当なし
les a entendu φ	2例中、不定詞を伴うもの1例 →その1例は受け身の意を表さない ⇒ 反例
les avons entendu φ	1例中、不定詞を伴うもの1例 →その1例が受け身の意
les avez entendu φ	該当なし
les ont entendu φ	該当なし

表2

本稿では受け身的意味が表されやすい主動詞として、感覚動詞の *voir* と *entendre* を考察対象としたが、両者の意味をよく考えてみると、言語事象として、*entendre* に比べて *voir* を主動詞とする方が、何かはどうされるの^をを耳にしたというよりも、何かはどうされるの^をを見たという受け身的表現に積極的に用いられやすいことが指摘できそうである。自動詞的表現についても同様のことが示唆されると考えられる。

3. まとめ

本稿では、不定詞を後続する過去分詞の性・数一致という言語環境につ

いて、前置された直接目的補語が不定詞の動作主である場合は過去分詞を一致させるという規則と、動作主でなければ一致させない、あるいは不定詞節が目的語でも受け身を表す場合は一致させないという例外を理解した上で、そのような規則にいたった歴史的経緯とそれに対する批評を引用しながら、規則と例外に対する疑問点を提示した。続いて、その疑問解決の糸口を見出すため、疑問点が形態的に表面化しやすい構文として *voir* と *entendre* を主動詞とする、不定詞を後続させる場合の過去分詞に着目し、コーパスから採取した用例分析を行った。

結果として、規則に反する「一致しない場合」については、現代フランス語において過去分詞の性・数一致が規則化されているにもかかわらず、そのような一致しない反例が *voir* においても *entendre* においても確認され、その反例は *entendre* よりも *voir* において多く観察された。また、*entendre* よりも *voir* において多くの場合で例外に合った「一致しない場合」が確認できた。これは何よりもまず、規則が定式化しているはずの現代フランス語においても実際には未だにゆれが確認できることを表していると言えるのではないだろうか。次に、意味的に受け身を表す構文としては、感覚動詞と言っても、*entendre* よりも *voir* を主動詞とする場合の方が本稿で問題とする構文が出現する可能性が高いことが指摘できる。加えて、*voir* を主動詞とする場合の方が、前置された直接目的語が過去分詞の動作主であっても規則に反する「一致しない」例が多いことが分かった。現代フランス語において、例外の規則に応じた一致しない用例が多いために、それに影響を受けるような形で規則に反する一致しない用例も多く存在するのか否かは分からないが、少なくとも疑念を抱いた文法規則の例外の一つである出現環境として、感覚動詞という観点から捉えてみると、動詞本来の意味の差異による影響を受けることが示唆できそうである。

本稿で考察の対象とした規則と例外、そしてその言語環境は非常に込み入った内容ではあるが、例外の例外とも言えそうな規則の例外を目の当たりにして、この言語事象が形態的・構文的・意味的要素が互いに依存し合

わなければならない、興味深くもあり、特異でもある事例であることが認識できる。

〈参考文献〉

朝倉季雄、「新フランス文法事典」、2011、白水社

島岡茂、「フランス語統辞論」、1999、大学書林

目黒士門、「現代フランス広文典」2015、改訂版、白水社

Joseph Hanse, *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne*, 1994, 3^e édition établie d'après les notes de l'auteur avec la collaboration scientifique de Daniel Blampain, De Boeck Duculot

Maurice Grevisse, *L'accord du participe passé*, 2016, 8^e édition revue par Henri Briet, De Boeck Supérieur

Maurice Grevisse, *Le bon usage*, 1993, refondue par André Goosse, 3^e édition revue, Duculot

¹ 例えば、小方厚彦（1998）「16世紀フランス語における過去分詞の一致について」や、本田忠雄（1995）「古フランス語における過去分詞の一致について」など。

² 1900年代半ば以降とすると用例に限られるため、1900年以降とした。